

Asia Indicators

発表日: 2022年11月18日(金)

インド、インフレ率は鈍化も引き続きインフレ圧力はくすぶる展開 (Asia Weekly(11/11~11/18))
 ~生活必需品のみならず、景気回復やルピー相場の調整の動きもインフレ圧力に繋がる展開~

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹 (TEL: 03-5221-4522/050-5474-7495)

○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
11/11(金)	(香港)7-9月実質 GDP(前年比・改定値)	▲4.5%	▲4.5%	▲1.3%
11/14(月)	(インド)10月消費者物価(前年比)	+6.77%	+6.73%	+7.41%
11/15(火)	(中国)10月鉱工業生産(前年比)	+5.0%	+5.2%	+6.3%
	10月小売売上高(前年比)	▲0.5%	+1.0%	+2.5%
	10月固定資産投資(年初来前年比)	+5.8%	+5.9%	+5.9%
	(インドネシア)10月輸出(前年比)	+12.30%	+13.85%	+20.17%
	10月輸入(前年比)	+17.44%	+23.62%	+22.02%
11/17(木)	(マレーシア)10月輸出(前年比)	+15.0%	+24.1%	+30.1%
	10月輸入(前年比)	+29.2%	+30.5%	+32.8%
	(フィリピン)金融政策委員会(翌日物借入金利)	5.00%	5.00%	4.25%
	(インドネシア)金融政策委員会(7日物リバースレポ金利)	5.25%	5.25%	4.75%
	(香港)10月失業率(季調済)	3.8%	--	3.9%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[インド]~インフレ率、コアインフレ率ともにわずかに伸びは鈍化も、全般的にインフレ圧力がくすぶる状況は続く~

14日に発表された10月の消費者物価は前年同月比+6.77%となり、前月(同+7.41%)から鈍化して3ヶ月ぶりに7%を下回る伸びとなった。しかし、前月比は+0.80%と前月(同+0.57%)から上昇ペースが加速しており、原油をはじめとするエネルギー資源価格の調整の動きに一服感が出ていることを反映してエネルギー価格の上昇ペースが加速しているほか、穀物などの国際価格の高止まりを受けて食料品価格も上昇基調が続くなど、生活必需品を中心にインフレ圧力がくすぶることが影響している。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+5.97%と前月(同+6.07%)から鈍化して2ヶ月ぶりに中銀(インド準備銀行)の定めるインフレ目標(4±2%)の域内に収まっているものの、前月比は+0.58%と前月(同+0.41%)から上昇ペースが加速するなど、インフレ圧力がくすぶる状況は変わっていない。エネルギー価格の上昇に伴い輸送コストに押し上げ圧力が掛かっている上、国際金融市場における通貨ルピー安の進展を受けた輸入物価の押し上げに加え、コロナ禍からの景気回復の動きを追い風にサービス物価も上昇傾向が続いており、全般的にインフレ圧力が強まっている様子が見えてくる。

図1 IN インフレ率の推移

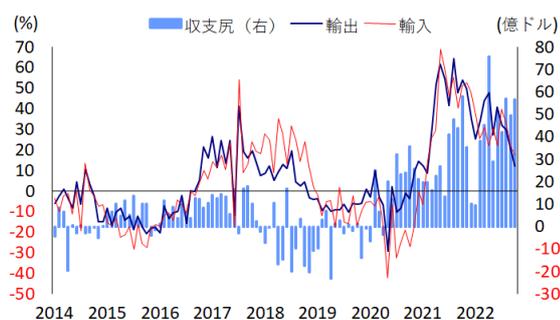


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[インドネシア]～輸出入ともに頭打ちの様相を強めるも、貿易収支は黒字基調で推移して黒字幅も拡大～

15日に発表された10月の輸出額は前年同月比+12.30%となり、前月(同+20.17%)から伸びが鈍化している。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比も2ヶ月連続で減少している上、中期的な基調も減少傾向に転じるなど底入れの動きが続いた流れが一服している様子が見える。原油をはじめとする国際商品市況の頭打ちの動きが一巡していることを反映して原油及び天然ガス関連の輸出額は押し上げられるほか、農産品関連や石炭などの鉱物資源関連の輸出額も底堅い動きをみせる一方、製造業関連の輸出額が頭打ちの様相を強めていることが輸出額全体の重石となっている。一方の輸入額は前年同月比+17.44%となり、前月(同+22.02%)から伸びが鈍化している。前月比も2ヶ月連続で減少しているものの、中期的な基調は拡大傾向を維持するなど輸出とは対照的な動きをみせている。原油などの国際商品市況の頭打ちの一服を受けて石油製品関連や天然ガスの輸入額は堅調な動きをみせる一方、それら以外の輸入額が下振れしていることが輸入額全体の重石となっている。結果、貿易収支は+56.74億ドルと前月(+49.69億ドル)から黒字幅が拡大している。

図2 ID 貿易動向の推移

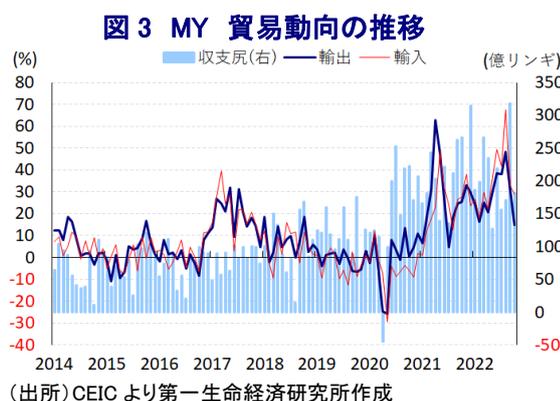


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[マレーシア]～世界経済の減速懸念の高まりを反映して、輸出に頭打ちの動きが強まる兆候がみられる～

17日に発表された10月の輸出額は前年同月比+15.0%となり、前月(同+30.1%)から伸びが鈍化している。前月比も▲14.3%と前月(同▲3.1%)から2ヶ月連続で減少しており、中期的な基調は拡大傾向が続いているもののそのペースは鈍化するなど頭打ちの兆候が強まっている。中国による『動態ゼロコロナ』戦略への拘泥がサプライチェーンを通じて世界経済の足かせとなる動きが続くなか、中国向けやASEAN(東南アジア諸国連合)など周辺国向け輸出が下振れしているほか、世界経済の減速懸

念の高まりを反映して米国やEU（欧州連合）向けなどにも総じて下押し圧力が掛かっている。一方の輸入額は前年同月比+29.2%となり、前月（同+32.8%）から伸びが鈍化している。前月比も▲2.1%と前月（同▲7.6%）から2ヶ月連続の減少で推移しているものの、中期的な基調は拡大傾向で推移するなど輸出とは対照的な動きをみせている。輸出の頭打ちを受けて資本財や中間財関連の輸入に下押し圧力が掛かる動きがみられるものの、消費財関連の輸入の底堅さが輸入額全体を下支えしている。結果、貿易収支は+180.88億リンギと前月（+318.37億リンギ）から黒字幅が縮小している。

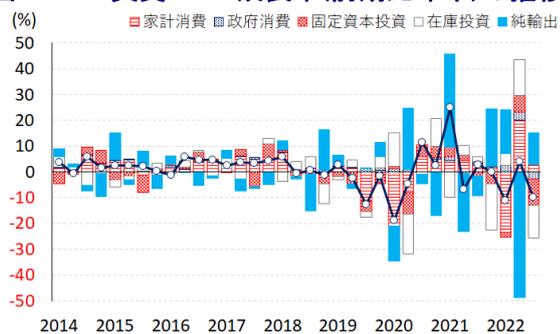


【香港】～中国本土における動態ゼロコロナ戦略の余波を受ける形で景気に下押し圧力が掛かる展開が続く～

11日に発表された7-9月の実質GDP成長率（改定値）は前年同期比▲4.5%となり、先月発表された速報値（同▲4.5%）と同じであったほか、前期（同▲1.3%）から三四半期連続となるマイナス成長で推移している。前期比年率ベースの成長率は▲9.98%と前期（同+3.98%）から二四半期ぶりのマイナス成長に転じており、中期的な基調もマイナス成長で推移するなど景気は弱含む動きを強めている。中国本土においては依然として『動態ゼロコロナ』戦略による厳格な行動制限が課される動きが続いているものの、香港では段階的に行動規制が緩和されていることを反映して家計消費は底堅い動きをみせる一方、中国本土景気を巡る不透明感に加えて世界経済の減速懸念の高まりを反映して財輸出は減少基調が続いているほか、外国人来訪者数の低迷はサービス輸出の足かせとなるなど総じて外需に下押し圧力が掛かる展開が続いている。さらに、中国本土における動態ゼロコロナ戦略への拘泥を嫌気した海外資本の流出を反映して固定資本投資は下振れしているほか、政府による景気下支え策の一巡も重なり政府消費も鈍化しており、結果的に輸入の減少ペースが輸出を上回ったことで前期比年率ベースにおける純輸出の成長率寄与度はプラスに転じており、実態はみため以上に厳しいと捉えることが出来る。

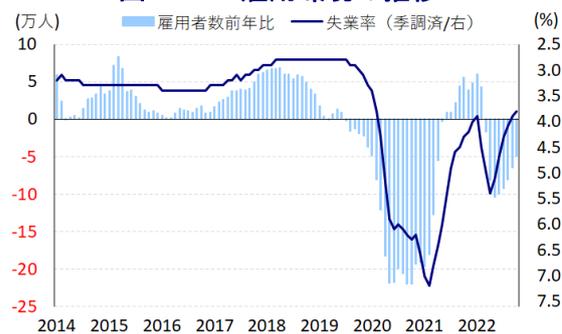
17日に発表された10月の失業率（季調済）は3.8%となり、前月（3.9%）から0.1pt改善している。失業者数は前年同月比▲2.5万人と17ヶ月連続で前年を下回る推移が続く一方、前月（同▲2.6万人）から減少ペースはわずかに鈍化している。一方の雇用者数も前年同月比▲5.0万人と8ヶ月連続で前年を下回る推移が続いているものの、前月（同▲6.4万人）から減少ペースは縮小するなど底打ちする動きがみられる。感染一服を受けた行動制限の緩和の動きを反映して小売関連や観光関連サービスを中心に雇用の底入れの動きが強まっているほか、建設投資の進捗を受けて建設関連においても雇用が底打ちする動きがみられる。雇用環境の改善を受けて労働力人口の減少ペースも大きく縮小するなど、労働市場への参加意欲が回復する動きもみられる。

図4 HK 実質 GDP 成長率(前期比年率)の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図5 HK 雇用環境の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。